

【基調講演】

## 世界を通じて地元を知る—— 高知商業高等学校「ラオス学校建設活動」を手がかりに

岩 佐 光 広

ありがとうございます。高知大学の岩佐です。よろしくお願いいたします。今、活動のアドバイザーと言われましたが、そんなに大層な形では関わっていません。どちらかという、陰ながら細々と応援しているというぐらいです。

今回は「世界を通じて地元を知る」というタイトルで、高知では非常に有名な、加えて、高知だけでなく今、いろいろな形で取り上げられてもいる高知商業高等学校のラオス学校建設活動を手掛かりに、今回のテーマについて考えてみたいと思います。

ここまで、羽瀨先生と内藤先生のお二人それぞれにお話しいただいたことからもうかがえるように、内藤先生から既に「地域は世界とつながっているのだ。大事なところは、そのつながりをどのように変えていくのか、そのための方法を考えることだ」というお話がありました。言われてみて、そういうイメージがありました、「なるほど、シンポジウムのタイトルの表現がこれでは良くないな」と思いました。

いろいろなつながり方、あるいはつなげ方を変えていくというやり方があると思いますが、お二人の先生の話聞いてみて、自分なりにポイントを考えると、大きくこのようなところがあるのではないかと。極めて簡単にですが、一つは世界、あるいは他の地域というものを知って関わってみようと思うということです。羽瀨先生の場合は、これをちょっとしたことをきっかけにつなってみようということだったと思います。内藤先生の場合には、降って湧いた事態に応じてみようということなのだと思います。もう一方で、こちらは意外と見えてこないのではないかと考えていますが、自らの地域を知って関わってみようという意識もあると思います。この二つの試みを有機的に結び付けていくことが今回、考えてみたいと思うテーマにつながっていると思います。

これを考えるに当たって、今回は高知において草の根的に展開されてきた国際協力活動を取り上げてみたい。あまり細かい話をするというより、まさに面白い活動をぜひ紹介したいと思っています。

取り上げる事例は、先ほどもお話しした高知商業高等学校の「ラオス学校建設活動」です。この活動をごく簡単に説明すると、東南アジアの一国であるラオスにおいて、学校建設を目的として、高知商業高校の生徒会が主体となって行っている活動です。1994年からかれこれ20年にわたって続けられている非常に息の長い活動で、これまでラオスに保育園、小学校、中等高等学校の計7校の建設に協力してきました。先ほども言いましたが、県内はもとより全国的にいろいろなところからインタビューを受けたり、外に出て行って話をしたりしています。非常に高く評価されていて、先ほど司会の岩佐和幸先生からもあったように、さまざまな賞なども受賞しています。この活動自体も非常に面白いのですが、特に今回、この機会に注目してみたいと思ったのは、先ほど内藤先生のお話にあったように、方法を目的化するのではなく、そういう活動を通じて何を実現しようとするのかということの方が大事だ、ということです。それでいくと、高知商業の活動は一貫して「ラオスと高知がともに豊かになる」、あるいは「ともに発展する」と表現されますが、このような目的が掲げられて、それに基づいた活動が行われています。

後ほど紹介しますが、この方針もそうですし、活動内容もさまざまな試行錯誤を通じて少しずつ育まれていき、具体化されてきたものです。この取り組みを紹介することで、今回のシンポジウムのテーマを考える手掛かりを得ていきたいと思います。むしろ、僕の方からこうだという意見を言うよりは、ぜひパネルディスカッションの素材を提供できればと思っています。

時間が押しているのですが、僕自身ラオス研究者なので、ごく簡単にラオスの話はぜひひしたいと思います。高知ともう一つの舞台になるラオスは、東南アジアの大陸のほぼ中央に位置します。ラオスという国の特徴は、東南アジア唯一の内陸国ということです。このような内陸国は、経済的な意味など、いろいろな特徴を生み出しています。正式な名前は、ラオス人民民主共和国です。面積（国土）は、日本の本州と同じぐらいの24万km<sup>2</sup>です。ただし、人口は680万人で、これでもかなり増えましたが、非常に小規模な国といえます。熱帯モンスーン気候で、雨期と乾期がしっかり分かれています。雨期のときの天水を利用した稲作が主要な生業になっています。政治面では、一党独裁体制の社会主義体制が1975年に敷かれています。経済面ではいわゆる途上国ですが、その中でも特に発展が遅れているとされる後発開発途上国の一つに数えられます。多民族国家で豊かな文化・伝統があり、それらと豊かな自然環境を合わせて「メコンの宝石」などと称されることもある国です。余談になりますが、日本との交流は、日本ではあまり有名ではありませんが、いろいろな形であります。例えば青年海外協力隊の最初の派遣国で、

日本とも意外とつながりがあると思います。

今回のテーマと関係して教育面について少しだけ説明をしておきます。近年になっていろいろな形で援助も含め、政府の取り組みやローカルな取り組みもあって教育環境は改善されつつありますが、今でも教育施設の不足や不備、教材の不足、教員の不足、あるいは政府の教育行政や予算配分が脆弱であったりといったさまざまな問題を抱えているのが現状です。

少し古い資料ですが、外務省が出している報告書にあるように、学校がない村が20%ぐらいですが、学校のある80%の村の中にも、不完全学校といって、全ての学年がそろっていない学校、例えば1～3年生までというような学校が結構あります。このような意味でも、高知商業高校の「ラオス学校建設活動」は、ラオス側にとっても非常に重要な課題になっていることと関わっているというのがうかがえるかと思います。

さて、ここから本題になります。ラオス学校建設活動の概要を話していくに当たって、高知商業高校の概要からお話します。高知市にあって唯一の市立の商業高校です。非常に歴史のある学校で、今年で116周年を迎えます。さまざまな商業系の授業がありますが、それに加えて、部活動などの課外活動が非常に盛んなことでも知られています。このような活動の一つとして、生徒会による「ラオス学校建設活動」が非常に盛んに行われています。

この活動が始まったきっかけはいろいろな形で既にかかれていたので、そのようなものを参考に話をしていくと、1994年にJICAの専門家でもラオスに派遣されていた高知県在住のOBの人がラオスに学校を作りたいという目的で「高知ラオス会」を設立されます。ただ、その運営資金はどうしたものかということで、地元メディアを通じて資金協力を呼び掛けたということがありました。当時の生徒会顧問だった岡崎伸二先生は、ずっと今も活動に関わられているキーパーソンの一人ですが、この岡崎先生がその呼びかけを知って、すぐ「高知ラオス会」に連絡をとって、協力したいという申し出をしたそうです。話を聞いたりする中で、生徒たちもぜひこれはやろうということになって、初めは文化祭で募金活動を行い、寄付をしました。その翌年の1995年には、実際に生徒会執行部がラオスを訪問するということがありました。このラオス訪問をきっかけにして「ラオス学校建設活動」が本格的に始動するということになりました。

そうして始まった活動ですが、年間の活動スケジュールがあり、こんな流れになっています(図1)。まず、生徒会で活動方針を提案して、その後、このスケジュールにそっ

て活動を行っていきます。その細かい内容について、主な活動を取り上げて詳しく紹介したいと思います。

## ラオス学校建設活動の概要(2)

### 活動の内容と年間スケジュール(2012年)

- 5月 生徒総会で活動方針の提案
- 6月 模擬株式会社説明会・株式販売(1)
- 8月 ラオス研修(2)
- 10月 市商祭
- 11月 はりまやストリートフェスティバル(3)
- 12月 株主総会
- 翌5月 ラオス学校建設資金贈呈式(高知ラオス会)

出所:高知商業高等学校(2013:8)より転載

図1 活動の内容と年間スケジュール (2012年度)

この活動のなかでも、特徴的で、評価も高く、生徒たち自身も積極的に取り組んでいる活動の一つが、「模擬株式会社」というシステムで、それを通じて活動資金の調達をしています。まず校内に模擬株式会社を設立して、生徒・教員・保護者らが株主になって、1株500円を出資をします。その出資金を元手に、今度は生徒たち自身がラオスを訪れて商品の仕入れを行います。仕入れた商品を文化祭や後でとりあげる「はりまやストリートフェスティバル」といった機会に販売し、そこで得た利益から、配当とともに出資金を株主に返金します。その余った残金を「高知ラオス会」を通じて、ラオス学校建設の資金に充てるという活動をしています。

模擬株式会社というシステムは、お話を聞くと、高知商業が随分昔に生徒会で考案してやっていたようなシステムの様です。それを探しだして、これは使えるということ で定着したシステムだそうです。

二つ目の活動は、ラオス研修です。10日間ほど、実際にラオスを訪れて活動を行います。主だった活動としては、建設した学校を訪問して、現地小学生らと交流し、加えて、学校で問題がないか、こちらが協力できることはないかなどの聞き取り調査などを行い

ます。もう一つは、先ほどの模擬株式会社の資本金を元手に、日本に持ち帰って売するための商品の仕入れを実施します。

三つ目の活動は、先ほどお話した、ラオスで仕入れた物を売る機会の一つである「はりまやストリートフェスティバル」です。商品の販売や、この活動の広報、加えてここが大事になってきますが、地域商店街の活性化を目的として、高知市内にあるはりまや橋商店街で開催されるイベントです。ラオスで仕入れた商品や、後でお話ししますが、生徒たちが企画・開発したオリジナル商品の販売、学校建設活動の紹介、各種イベントを行って、2日間にわたって、この商店街を舞台にイベントをやります。

ちなみに去年の「はりまやストリートフェスティバル」で、パネルディスカッションを行いました。それが「交流からビジネスへ——ビジネスチャンスを高校生が作ることができる?」ということで、僕も農業関係の会社の方と、水産関係の会社の方とともに、「ビジネスモデルが何かありませんか」と言われて参加してきて、「高知商業生と行くラオスの旅」という観光業を意識した提案をしてきました。

こうした活動とともに、もう一つ近年力を入れているのがオリジナル商品の開発です。「ラオスと高知を結ぶ」をテーマに、加えてフェアトレードや環境問題といったさまざまな問題も意識して、高知とラオスをモチーフにした商品を開発しています。

今、ここに実物があります(図2)。後で置いておきますので、ぜひご覧ください。この中の一つ、例えば、「はりまや箸」というお箸セットです。これは観光名所であり、これを販売する場所でもある「はりまや橋」をモチーフにした箸と袋のセットで、マイ箸を使ってもらって、環境にもよく対応しようという意識が込められています。箸袋は、ラオスの国営企業であるラオコットン社にフェアトレード商品として作ってもらって、お箸の方は初めは高知県産の間伐材を使って、環境問題を意識したお箸を作るというようなことをやっていました。ただ、その後、幾つかの問題から、箸の生産は福井のお箸会社に切り替えて、もう少し生産を増やしていくということを目指しているそうです。



図2 企画・開発されたオリジナル商品の一例

このようにさまざまな活動を行っていますが、こうしたシステムが活動の初期からあったかというとはそうではなく、段階的に展開してきました。この活動の開始は1994年ですが、模擬株式会社とラオス研修が始まるのが96年、はりまやストリートフェスティバルが2000年で、オリジナル商品開発が始まるのは2004年です。このようなことを段階的に試行錯誤して、チャレンジすることを通じて今のこれらの一連の活動につながっています。これはまさに「ラオスを知って関わること」と「高知を知って関わること」の両方をうまく結び付けていくことができた積み重ねの成果といえます。

当時の生徒会の顧問の岡崎先生にお話を聞いたり、書かれたものを読んだりすると、そこには次のような意識があったことがわかります。例えば、活動が始まった当初は募金活動などをしていましたが、その当時は途上国に支援しようという気持ちがあったかもしれないと言っていました。しかし、その後にラオスを実際訪問したとき、こちらがラオスに対して何かをするというだけでなく、実際に行ってラオスからいろいろなことを学んでいるのではないかと。そういうことを考えると、一方的に何かするのではなく、僕らも何かを受け取っているのだから、お互い様なのではないかと。そういう意味では、私たちとラオスの人たちは「対等な関係なのだ」と考えるようになったそうです。岡崎先生のお話を聞くと、そうした気づきがあったということ強く感じさせられました。

その後、「高知とラオスがともに発展する」ということをキーワードに、では、何ができるかということで始まったのが模擬株式会社であり、このような意識をしっかりと持つためのラオス研修だったわけです。

その後、実際に仕入れを始めましたが、やってみると、文化祭で売るのには限界があるので、もう少し売っていくハードの拡大が課題になってくるし、もっとこの活動を知ってほしいということで、広報を広げていくという意識もあって、98年と99年に百貨店でラオス物産展を開催したそうです。こうしたことで、今度は地域と関わってみたときに、確かに目的であった販路と広報の拡大できましたが、そこでもう一つ気づきがあったそうです。それは、自分たち高知商業側の「ラオスと高知がともに豊かになろう」という意識と買ってくれるお客さんの意識とのあいだに少しずれがあったということです。というのも、お客さんの側としては、やはりラオスのために何かしてあげられたらという意識や、「頑張ってね」という形で高校生である彼らに応援するという意識で買ってくれたりするわけです。自分たちはラオスとともに地元の高地もふくめて盛り上げていこうと思っているけれども、どうしても地域の人との意識のずれを感じてしまったそうです。

では、どうするべきか。そのときに、やはりもっと地域を知って、地域に関わっていく、地域に貢献できるようなところが必要になってくるだろうと。それがうまく結び付いていく中で、初めて自分たちが目指す高知とラオスがともに豊かになるということが実現できるだろう。そうした意識のもとで始まったのが、商店街でのストリートフェスティバルだったということです。

では、このような活動の展開と20年にわたる継続はなぜできたのでしょうか？これについては先ほどから言及している岡崎先生が著書のなかで、「とりわけ重要な成功要因は、ラオスの課題だけを強調するのではなく、高知（地域）の課題と共有化させたことである」とおっしゃっています。これはまさにそのとおりですが、ここで考えてみる必要があるのは、「では、なぜそれができたのだろうか」ということです。

私がなぜこんなことを思うかという、国際協力活動というものの難しさがあるから考えるからです。ささやかな経験ですが、僕自身も学生と一緒にスタディツアーなどをやってみて気付くことですが、いわゆる「本当の笑顔を知りました」「人と人とのつながりの大切さを知りました」という、言ってしまうと、みんながそれは大切だと思ってしまうような一般論的なことが、国際協力活動の経験として語られてしまうということがしばしばあります。それはそれでももちろん大事ですが、そうした経験だけでは、今度は具体的に、ではそれを踏まえてどう活動を展開していくかという、次の一歩につながりにくいと思っていました。そう考えると、確かに高知商業の高校生たちも同じように、このように実際に感じたことを語っていただきますが、しかしそのような一般論に終わ

らずに、先ほど見てきたように、具体的に活動が展開していくのはなぜなのだろうと思いました。

そのときに重要だと思うのは、羽瀨先生がおっしゃっていたことですが、もちろん言うまでもなく、生徒たちの真摯で誠意のある取り組みと先生方や保護者の方のしっかりしたサポートのたまものではありますが、もう一つこの活動の舞台が「地域」「地方」だったということが大事だったのではないかと思います。

実際に羽瀨先生のお話にもあったように、地方自体には今、さまざまな問題が山積しているとともに、それだけでは捉えきれない、そのような影響の中でいろいろなことをやっていくという可能性の両方が混在しているような状況にあると思います。これを大ざっぱに「地方性」と呼んでみると、この活動自身で何があったのかということを見ると、ラオスの課題と可能性を知り関わることを通じて、自分たちの生活の場である高知を見つめ直してみたときに、自分自身も含めてアクチュアルなものとしての地元の課題と可能性、言うなれば、地元の「地方性」が再発見され、具体的な形をもって見つかるのではないかと思います。

こうした経験の一つのエピソードとして、例えばある高知商業生が実際にラオスに行ってみて、医療格差があることを知ったそうです。それで、高知でもあるのではないかと調べてみると、やはり同じようなことがありました。このような中から、直接こういう活動に関わっていくわけではありませんが、自分なりにもともとあった漠然と看護師になりたいという夢が、今度は「地方で働く看護師」という具体的な目標になったといいます。

異なる世界を通じてもう改めて自分の足元に目を向けたとき、抽象的で漠然とした話ではなくて、自分にとってもアクチュアルな問題や可能性として高知が発見されてくる。そういう意味では、世界の「地方」であるラオスと、日本の「地方」である高知というものの「地方性」が呼応したのではないか。だから生徒たちが非常に具体的な意識を持って取り組むことができたのではないか。こうしたことも大事だったのではないかと思います。

最後に、初めに述べましたが、このような形で取り組んできた高知商業高校の活動を通じて、どんな若者たちが育つのだろうかという点を考えてみたいと思います。現在、グローバル人材の育成ということが盛んに論じられていることは、初めに岩佐和幸先生からのご指摘もありました。このグローバル人材の育成を考えていったときに、一番置き忘れられていることは「地元」という視点ではないかと思います。加えて、グローバ



ル人材の育成をやっていった結果として、多分、多くの人が地元を離れてしまうのではないかと思います。グローバル人材として頑張って若者を育成すればするほど、地元を出て活躍しようとする人たちがどんどん増えていきます。もちろんこういった人材の育成も大事だと思いますが、もう一方で、それを頑張れば頑張るほど、地元の衰退に拍車を掛けてしまうようなこともあるのではないかと思います。

このようなことは、服部晃夫さんという方が離島教育の現実として語っています。離島教育で頑張って学校教育をやっていけばやっていくほど、優秀な子ほど外に出て行って進学を目指すという選択肢になってしまう。地元の学校で教育を頑張れば頑張るほど、地元に残らない若者を作ってしまうなどという話をしています。その板挟みの中でどうするかということを考えているような本があります。本当にそういうことが、グローバル人材の育成においても起こっているのではないかと思います。

それに対して考えると、ラオス学校建設活動のような取り組みを通じて育みうる若者たちとは、まさに世界というものとつながりながら、まさに内藤先生の話でいくと、つながり方をすごく考えながら地元で根差して生きていくような若者たちを育てていくことができるのではないかと思います。ざっとですが、このようなところも含めて地域が世界とつながりを持ちながら、あるいはつながっている状況を工夫して自立的に変えていくところから、いかに取り組んでいくかということはやはり大事ではないか、地域にとっても大事なことなのだろうと思っています。

最後になりますが、高知商業の活動に皆さんも興味を持ったら、いろいろな形でメディアなどに取り上げられているので、いろいろ調べてみて、株式を皆さんも買えますので、皆さんもぜひ株式を購入して協力していただければと思います。今日の目的の一つとしては宣伝もありますので、皆さんぜひご協力ください。以上です。ありがとうございました（拍手）。

(い わ さ み つ ひ ろ 高知大学准教授)